

イエスこそ主なり

[聖書]出エジプト記 32章 1～14節

モーセが山からなかなか下りて来ないのを見て、民がアロンのもとに集まって来て、「さあ、我々に先立って進む神々を造ってください。エジプトの国から我々を導き上った人、あのモーセがどうなってしまったのか分からないからです」と言うと、アロンは彼らに言った。「あなたたちの妻、息子、娘らが着けている金の耳輪をはずし、わたしのところに持って来なさい。」民は全員、着けていた金の耳輪をはずし、アロンのところに持って来た。彼はそれを受け取ると、のみで型を作り、若い雄牛の鑄像を造った。すると彼らは、「イスラエルよ、これこそあなたをエジプトの国から導き上ったあなたの神々だ」と言った。アロンはこれを見て、その前に祭壇を築き、「明日、主の祭りを行う」と宣言した。彼らは次の朝早く起き、焼き尽くす献げ物をささげ、和解の献げ物を供えた。民は座って飲み食いし、立っては戯れた。主はモーセに仰せになった。「直ちに下山せよ。あなたがエジプトの国から導き上った民は墮落し、早くもわたしが命じた道からそれて、若い雄牛の鑄像を造り、それにひれ伏し、いけにえをささげて、『イスラエルよ、これこそあなたをエジプトの国から導き上った神々だ』と叫んでいる。」主は更に、モーセに言われた。「わたしはこの民を見てきたが、実にかたくなな民である。今は、わたしを引き止めるな。わたしの怒りは彼らに対して燃え上がっている。わたしは彼らを滅ぼし尽くし、あなたを大いなる民とする。」モーセは主なる神をなだめて言った。「主よ、どうして御自分の民に向かって怒りを燃やされるのですか。あなたが大いなる御力と強い御手をもってエジプトの国から導き出された民ではありませんか。どうしてエジプト人に、『あの神は、悪意をもって彼らを山で殺し、地上から滅ぼし尽くすために導き出した』と言わせてよいのでしょうか。どうか、燃える怒りをやめ、御自分の民にくだす災いを思い直してください。どうか、あなたの僕であるアブラハム、イサク、イスラエルを思い起こしてください。あなたは彼らに自ら誓って、『わたしはあなたたちの子孫を天の星のように増やし、わたしが与えると約束したこの土地をことごとくあなたたちの子孫に授け、永久にそれを継がせる』と言われたではありませんか。」主は御自身の民にくだす、と告げられた災いを思い直された。

[1] モーセと神様の真剣勝負

今日で一応「出エジプト記」の学びの最後になります。今日の箇所、よくご存じの方も多いと思います。イスラエルの民のために、神様に対して執り成しをするモーセの姿がここにあります。これは出エジプト記の中、或いは旧約聖書全

体の中でも白眉と言えるところではないかと思えます。今日は14節までを読んで頂きましたけれども、まだ先がありまして、モーセと神様との真剣勝負と言いますか、本気のやりとりが続き、遂にモーセはこのような言葉さえ語るのですね。

「モーセは主のもとに戻って言った。「ああ、この民は大きな罪を犯し、金の神を造りました。今、もしもあなたが彼らの罪をお赦しくださるのであれば……。もし、それがかなわなければ、どうかこのわたしをあなたが書き記された書の中から消し去ってください。」(32:31~32) —このモーセの執り成しの故に、主なる神様はついに34節で、「今、わたしがあなたに告げた所にこの民を導いて行きなさい。見よ、わたしの使いがあなたに先立って行く」と言われたのです。神様はイスラエルの民を裁くことなく、憐れんで下さいました。モーセの、自らの存在を賭けた真剣な祈りが神様を動かしました。神様は決して石でも動かない冷たい方なのではなく、むしろ、私たちの求めを待っていて下さる、そういう極めて人格的なお方なのではないでしょうか？ 今日の箇所は、一つには、そのことを教えてくれています。

[2] 「神」を作り出す私たち

けれども、ここでまず考えてみたいことは、なぜイスラエルの民は、このような愚かな過ちを犯してしまったのでしょうか？ 理由は書いてありますね。1節から。「モーセが山からなかなか下りて来ないのを見て、民がアロンのもとに集まって来て、「さあ、我々に先立って進む神々を造ってください。エジプトの国から我々を導き上った人、あのモーセがどうなってしまったのか分からないからです」と言うのです。…彼らは、あのような偉大な葦の海の奇跡を目の当たりにしたばかり、そして心から主なる神様と契約を結んで、「私たちは、主が語られた言葉をすべて行います」(24:3、7)と誓ったばかりのイスラエルの民なのです。そして今、モーセの兄アロンに詰め寄り、「我々に先立って進む神々を造ってください」(32:1)という訳です。この、「弱さ」と言えば「弱さ」です。そして「罪」であることには違いありません。しかしこれは、私はある意味、無理もないことなのかなと思いました。

どういう事かと言うと、彼らはこの段階ではまだモーセに寄り頼んでいたのです。モーセは英雄、ヒーローだったのです。そのヒーローが40日間山に入っただけで戻ってこない。自分たちはこれから全く新しい生活をせねばならないのに、モーセは死んでしまったかもしれない。もしかしたら彼らはモーセを神格化していた部分があったのかもしれない。ですから新しいリーダーではなく、「神々を造ってほしい」と言ったということもあったかもしれません。これは考えさせられます。私たちは、不安や恐れに苛まれると、**自分流の神様**を造るのです。

私が以前よくキリスト教放送局 FEBC の元局長に言われたのは、「私たちはイ

イエス・キリストに繋がっていないと、いつも自分流の神を造り、それに従ってしまうのだ」ということでした。そうだなあと感じます。「偶像」というのは外部にあるというより、**自分の内側の反映**なのですね。自分流に生きるために、神様をこしらえ、利用するのです。本当の神様という方を“知らされない”と（自分で知るのではなく）、人間にとって、神とは抽象的なもの、変幻自在なもの、人格の無いものでしかないのです。だから焦点が合わずに彷徨ってしまうのですね。

その意味で、私たちが「**信仰告白に立つ**」ということはとても大事なのですね。「**信仰告白**」というものは、抽象的ではありません。「イエス様こそ、私の主、救い主です」という極めて具体的なことが、私たちの共通した信仰告白です。これは、旧約聖書の時代の人々は出来ませんでした。「神」なる存在が、「人間」の姿を取るなどということは、当時は想像を超えた出来事であったからです。

今の私たちも同じなのではないかと思えます。神様を知らされない中では、被造物に過ぎない存在を神格化してしまうことがあります。いや、実は、意識する・しないということを超えて、**自分自身を神として崇めていることがあるのではない**でしょうか？**全ての基準が「自分」**になっているということです。これは、イエス様と出会った時に、どれ程自分が自己本位のメジャー（定規）を持っていたかということが示されるのですね。私自身そうでした。自分の人生の「あるじ」は私でした。けれどもその中で行き詰まり、生き悩んでいたのですね、本当は。

[3] 眠りこける私たちの背後にあって救いをもたらしてくれたお方

フランスの哲人パスカルは、『パンセ』の中でこのようなことを言っています。「われわれは、ただイエス・キリストによってのみ神を知るばかりでなく、またイエス・キリストによってのみわれわれ自身を知る。われわれはイエス・キリストによってのみ生と死とを知る。イエス・キリストを離れて、われわれは、われわれの生、われわれの死、神、われわれ自身が何であるかを知らない。だから、イエス・キリストのみを主題とする聖書がなければ、われわれは何も知らず、神の性質についてもわれわれ自身の本性についても、曖昧と混乱とを見るだけである」。

聖書が語るイエス・キリストから目を外すと、私たちは曖昧と混乱を見るだけだ、と言うのですね。今日の聖書の箇所でも本当にそうです。「**彼らは和解の献げ物を供えた。民は座って飲み食いし、立っては戯れた**」とありますが、宗教的行為をしながら、**我を失っている**のです。けれども、その人間の闇が一番深くなるような最中に、その背後で、モーセが神様に直談判をしているのです。あなたの怒りはもっともですけれども、どうか裁くことを思い直してほしいと言ひ、最後には、私をあなたの書き記した書から消し去ってもよいから、彼らの罪をお赦し下

さいと、恐らくは涙ながらの訴えをしているのです。ここにあるのは、モーセの深い神様への信頼と、自分の民への「愛」ですよね。

この人間モーセ、神様と民との間に入り、自らが苦しむことによって民の罪を贖ったモーセの姿は、新約の時代の、**神の子イエス・キリストの姿**を遙か昔に映し出していると言ってしまうのではないのでしょうか。思い起こすのは、あの十字架にお架かりになる夜の**ゲツセマネの園**における切実な祈りです。

「父よ、出来ませうならこの杯をわたしから過ぎ去らせて下さい。しかし、わたしの願いどおりではなく、御心のままに」(マタイ 26:39)。比類なき真剣な、真実な、血のような汗が滴るような祈りです。主は、ご自分が苦しみ、命を献げる道を選び取りました。私たち人間の、神様への反逆の罪をご自分が背負う、という愛の故です。

その時も、弟子たちはゲツセマネで眠りこけていたことが書いてありますね。私はあの部分に慰めを覚えるのです。何て鈍感な弟子達なのでしょう。何て主の苦しみ、その心が分からない者たちなのでしょう。でもその弟子たちとは私たち自身ではないのでしょうか？丁度イスラエルの民が我を失って戯れていた時、モーセが神様に食らいついていたように、弟子たちが主イエスの祈る姿を全く見失っていた時、その彼らも含めた**すべての人間のために**、主イエスは神様との間で、**十字架**を甘んじて受けるという形で救いを成し遂げる取引をされていたのです。祈り終わってから、主は「**あなたがたはまだ眠っている。休んでいる。もうこれでいい。時が来た。人の子は罪人の手に引き渡される。立て、行こう**」と言われました。そうです。私たちに対する神様の救いとは、私たちが自分を失っている時、全く眠りに落ちている時に、**神様が一方的にして下さったこと**なのです。その主は十字架の上で、それこそ執り成されました。—「**彼らをお赦し下さい。何をしているのか知らないのです**」(ルカ 23:34)。—これが、私たちの「主」です。神様です。私たちの人生の「あるじ」です！結婚式で「一生この人と歩んで行きます」と喜び誓うように、私たちも礼拝の度ごとに、この主イエスと歩んで行く、その恵みを新たにさせて頂きたいと思います。いや、私たちの決意に先立って、主は「**わたしは主、あなたの神**」!(出エジ 20:2)と宣言下さっているのです。お祈り致します。

愛する主よ、あなたを「わたしの主」と呼ばせて頂けることは何と幸いなことでしょうか！偶像を造り、戯れ、また全くあなたの愛に鈍感な者ですのに、あなたの方が私たちを招き、赦し、神の子として迎えて下さいました。私たちに来ることは、生涯あなたを「主」とし、讃え、感謝する人生を歩むことです。弱い私たちをあなたは支え、その一步一步を確かなものとして下さいます。私たち自身の生き方が、証しとなりますように。主の御名によって祈ります。アーメン。